

# 油症発生当時の 症状とその後の 経過



油症では皮膚症状をはじめとして、神経症状、関節症状、呼吸器症状など実にさまざまな症状が認められました。

- チーズ様の目やにが出る
- 爪、歯肉、くちびるや口の中、目のまわりなどの皮膚が黒くなる
- 黒にきびや赤みのあるにきびが多発する
- 顔面、腋の下、股などに小さな皮膚のふくろができる
- 肌が乾燥して毛穴が目立つ
- 顔や関節がむくむ
- 手足がしびれる
- 全身倦怠感、食欲不振などの全身症状があらわれる

## ▼油症の重症度分類（1968年当時）

重症度	決定的所見	参考的所見
第1度 (極軽症)	マイボーム腺よりのチーズ様眼脂の排泄 色素沈着(爪)	発汗過多 口腔粘膜、歯肉の色素沈着、皮膚の乾燥
第2度 (軽症)	面皰	関節部、四肢伸側の毛孔性角化
第3度 (中等症)	ざ瘡様皮疹 外陰部脂腺に一致した嚢腫 頸部、項部、前胸部の毛孔の著明化	眼瞼の腫脹 関節部の腫脹
第4度 (重症)	全身の毛孔の著明化 広汎に分布するざ瘡様皮疹	顔面、下腿の腫脹 高度の二次感染

(福岡医学雑誌 1969年版60巻409頁)

## 臨床経過

体内に吸収されたPCBならびにPCB関連化合物は腸管、皮膚、母乳、喀痰等を通してゆっくりと排泄されるため、症状はゆるやかですが徐々に回復に向かいます。しかしながら、これらの化合物は組織残留性が高いため、患者さんの中には今もお血液や組織中のPCBやダイオキシン類の濃度が健康な人に比べて高い人もみられます。

油症の症状は時間の経過とともに徐々によくなりつつありますが、50年以上経過後も依然としてさまざまな症状がみられています。